

第1回磐田市子ども憲章制定委員会 会議録

開催日時 : 平成26年7月29日(火) 13:30~15:40
出席者 : 委員13名
事務局 : 5名

1. 開会

2. 委嘱状交付

3. あいさつ・懇談

市長:非常に思い入れのある事業であるので、趣旨を説明させていただきたい。青少年問題協議会のなかで、学校でも頑張っているが家庭教育もしっかりしてもらいたいという話があった。子ども憲章を創っても所詮文字であるので、子ども憲章を創ったら立派に子どもが成長するというわけではないが、今起こってる現象・事件を考えると、子ども憲章・行動指針を創り、公民館や市役所、支所にも看板を作って市民運動につなげていきたい。こんな思いで、合併10年を機に子ども憲章を創っていききたい。

ウォーキング中交通ルールを守らない老夫婦がいた。子どもばかりでなく、大人も手本を見せる意識をもたないと感じた。高校も大学も大学院も社会に出るための準備期間であるが、偏差値だけを追い求める時代になっているので、礼儀・礼節・情操教育・しつけだとかという部分をおろそかにしてきた歴史がなかるうか。

子ども憲章や行動指針を創っても事件がなくなるかわからないが、今を生きる者として、次の時代のために精一杯汗を流そうではないか、というのが皆さんにお願いしたいことである。今日やっけてすぐ明日成果がでるものではないが、だからこそ、遠回りのようだがやっけていきたい。その成果がいつか現れることを信じている。

4. 委員長・副委員長の選出

5. 議事

(1) 磐田市子ども憲章制定についての概要説明(体制・スケジュール等)

子ども憲章の制定について事務局より説明

6. 報告・意見交換

(1) 目指したい子どもの姿について

(2) そのために、子どもたちに伝えたいこと

議長:それぞれどんなことを考えていらっしゃるのか、思いを本音の部分でお聞かせいただきたい。

委員:青少年とのかかわりが多かった。児童憲章もみてみたが、いい子だけを対象に考えられて

いる感がある。道を外さないように、という視点でも考えてみたい。

委員：以前幼児教育に携わっていたとき、子どもたちを守るためには、「妄りに人に話しかけない」「話しかけられても答えない」という指導をしていた。ところが、磐田の保育園においては、散歩の途中、2歳児であっても畑仕事をしている方との自然なやりとりがなされていた。自分たちの教育は間違っていたのではないか。幼児教育にあたる方たちにもこうしたことを伝えていきたい。

東京の幼稚園では各園に弁護士が付くほど、保護者対応が大変ということも聞いている。

委員：都会では、正規の保育時間を越えて13時間近く園にいる子どもがほとんどで、母は疲れ果てていたように思う。磐田もそうになってきているか。周囲のお母さんたちも悩んでいて、閉塞感があるなかで、なんとか子育てをしているように感じる。現在の環境に不満はあるが、しょうがないと感じている方が多いように思う。親になったとたんに、「親とはこうです」といわれる。親になるまでの間に育っているべきところの基礎を、こども憲章で育てていけたら、すばらしいと思う。大人憲章でもある。突然大人になるわけではないので。

委員：家庭の問題は、どなたも悩んでいる。各団体、学校熱心にやっているが、それが浸透していかない。学校の先生は大変忙しい。地域は何をやっているのかと思い、登下校の安全確保を地域に呼びかけたところ、地域が動いてくれた。学校の先生は子どもと過ごす時間を確保すべき。あいさつ運動につながったり、子どもたちの変化が察知できるようになったり、地域ぐるみの成果がでる。こども憲章も地域ぐるみで取り組んでいきたい。

委員：今年は、子どもたちから自主的に「よろしくお願いします」というような声が出るようになってきた。声かけ運動取り組みの積み重ねの効果かと感じる。

保護者について。選手に選ばれなかったときに「なんでうちの子が・・・」という声がある。指導者・監督の考え方によるので、保護者にも理解をしてほしい。大人のための憲章でもあるかと思う。

委員：自分が小さいときには、何か悪いことをすると近所の方から叱られることがあった。そういうなかで育ってきた。今は核家族が多く、兄弟も少ない。以前地域には、「よその子と一緒に叱ろう同じだよ」というような標語が辻々に立てられていた。こども憲章もこうした短い言葉で皆さんに伝わるとよい。

委員：やはり行き着くところは、家庭・地域であるが、どうしても手が届かない。道しるべの上には、「ふるさとを愛し、未来をひらく、心豊かな磐田市民」という磐田の教育目標がある。文科省は、今の社会をたくましく生き抜く力を言っている。人には帰巣本能があり、きちんと愛されているという確信がほしい。これが、人間として生きていく力につながる。磐田の子どもたちが、命のリレーランナーとしての認識をもち、また、家族・郷土・国といった絆という、縦と横の接点に自分が立っていることを学び、実感して社会に出ていく。今自分が立っている位置を認識し、これまで育ってきた自分を自覚してこそ、これからをたくましく生きていけるのではないか。

自分が、学生時代に感じた寂しさは、疎外感、孤立感によるもの。人はつながりのなかで

生きている。そういうことをつかんだ人が元気に生きていけるのでは。

委員：子育ては、地域の人に支えられていることを実感している。防犯パトロール、あいさつ運動などを通して、知らない大人に声を掛けられることで、あいさつや話ができるようになっていくのではないかと思う。子どもたちには、コミュニケーション、人と会話できる大人になってほしいと思う。携帯電話が普及し、10年後、20年後はもっと違う形で情報が早く流れるようになっていく。やはり人と会話ができるというのが、あるべき姿かと思う。人と会話できるということは、自己肯定や相手を認めることができなければならない。社会性を身につけていてもらいたい。

委員：「どういう子に育てたいか」の問いに対して、「子どもが社会へ出た時に、社会から愛される価値のある人間に育ててほしい」といわれた。その子自身が社会から愛される価値のある子であれば、その子は生きていける。学力をつけたいとか、運動を伸ばしたいとかいろんな思いがあるが、社会へ出ていくのだから、社会人として認められる、困っていたら助けてあげたいと思われるような人間に育てていかなければいけない、そして、また、困っている人を助けてあげられる人間に育てていかなければいけない。

思いやりだとか、人の気持ちがわかるだとか、人を支えるだとかいう思いが、このこども憲章のなかにはいるといいと思う。

委員：「明日が楽しみ」と言える子を育てたいと思う。抽象的ではあるが、「明日が楽しみ」といえる子ども、大人がやはりベストではないか。「じゃあまた明日ね」という言葉が、心底楽しみで手を振って別れるというのが、子どもも大人も聞こえないのが気になる。

今「どんな子に育てたいか」と全国でアンケートをとると「思いやりのある子」が一番に挙がるが、思いやりのあることを受けていないと、思いやりのある子は育たない。思いやり、やさしさを受けてない子は、そうなるのは難しい。

子どもや保護者と話をするなかで、一番に出てくるのは「認めてほしい」ということ。いいことも悪いことも丸ごと認めてほしい。磐田だけでなく全国的に家庭も教育もそうだが、「指示・命令・注意」が多い。こども憲章をつくる時、文章にすると、さもやれてないような感覚の上からの言葉になってはいけない。

心を癒す方法を知らない大人と子どもが多すぎる。自分の発散の仕方、ストレスコップがいっぱいになっても吐き出すところがないことが気になっていて、このこども憲章によって、大人になって気が付いたらできてたという磐田っ子であってほしい。NHKの大河ドラマ「八重の桜」で会津藩「什の掟」は、今でも会津の子どもたちに受け継がれているというのが、当たり前なのが書かれているが、大人になると大変だったことも忘れて、気が付いたらできてたというのが家庭力だと思う。

委員：保護者対応については、これまでの経験から対応策ができるので、一時期にくら

べれば、全般的にはそれほど大変ではない。それよりも重たくなってきているのは、たとえば、両親の離婚等により祖父母に育てられているようなケース。子どもたちは寂しくてやりきれない。そういう生徒にどういう言葉がけをして、やる気を引き出していくかは、非常に重たい。虐待、それに近いグレーゾーンのケースが増えている。親、特に母親が精神的な病を抱えているケースは、子どもにとっては厳しい。何人かの親から子どもを預かってくれる施設がないかと頼まれたことがある。これがクレーム以上に、本当に学校が頭を抱えてしまう深刻な問題である。どんなことが起こっているかを新聞やマスコミから聞かすが、少ないケースであって、磐田市全体の家庭教育力が下がっているとかいうことではない。全般的にはすごくいいと思うが、そういう問題も起こっている。こども憲章ができたときに、そういった生徒が少しでも自分たちの将来に対する望み、生きる希望を持てるようなものになればいいと思う。こども会議においても子どもたちが周りの問題に対して、どのような問題意識、課題意識をもっているか、というところから作っていくという発想はすばらしいので、どんな意見が出てくるか楽しみにしている。例えば、あいさつ。中学生たちは自分たちはあいさつしっかりやっているとと思っているが、大人はもう少し大きい声でと思う。そういう「ずれ」がままある。磐田の教育道しるべのなかで、一番付けてほしい、足りないと思うのは、自己肯定感、「自分のよさを誇りとし自信を持って行動すること」自分に自信をもって行動するという、自尊感情、日本の子どもたち全体が海外の子どもたちに比べて低いというのは何度も新聞に出ているが、磐田の子どもたちも自分にプライドをもって、自分に自信のもてるような力、感情を身に着けてやることを一番大切にしていきたいと考えている。

荒れた子どもたちを救っていくためのベースとなる親が一生懸命になるかならないかというところは、すごく大事で、親が学校や地域と一緒にあって、一生懸命になってくれれば、その子を引っ張り上げることができるが、親がしかたないというふうになると終わりである。最近はそのような傾向が出ていて、それが心配である。

委員：生徒指導をしているとき、定期的に地域の方と補導に回った。自転車で無灯火の男子高校生に対し、注意したことがあった。「ライト点けなさい」と注意したら、「はい、わかりました」と返ってきたので、拍子抜けしてしまったが、こういう高校生もいるのかとうれしくなった。補導が終わり、帰りに自宅近くで、ライトを点けて走っている高校生に出会い、磐田の高校生も捨てたものではないと感じ、いい気持ちになった。大人の忠告を素直に聞けるというのはすごく大事なことで、素直さは大切だと思っている。「理念」として書いてしまうと、あたかも磐田市の子どもたちが、こういうところが欠点というか、欠けているから付けさせたいと思っはいけないと思う。磐田の子どもたち、ここを大切に育てていきたいということを理念のなかにもっていく、そういう考え方でいかないといけないと思

う。いじめ撲滅サミットに出席した。各学校で話し合ったことの発表だけで討論ではなかったが、他校の児童生徒の発表がとても刺激になって帰ってきた。主催する側からすると大変な苦労だとは思いますが、こども会議のワークショップのなかで、どんな言葉が出てくるか、楽しみにしている。それが行動指針に示されるのはとてもいいことである。

議 長：こども会議は傍聴できるか。

事務局：こども会議については、傍聴可能。8月1日西庁舎、6日豊田農村環境改善センター、7日福田支所、いずれも1時30分から2時間程度。時間の許す方はご覧いただきたい。

議 長：気になったのが、自尊感情、自信、社会から愛される、どうすれば愛されるか、成人するまでに、自分のいいところを見つけられれば、生きていけるんだろうな、それはあいさつでもいい、何かを極めていけば自信につながるのでは。

委 員：人と人とのふれあいが大切と感じる。

委 員：自尊感情の低い子の中にマスクを外せない子が増えている。マスクを取るよう指導はするが外せない。相手との距離感を保つためのバリアとしてマスクをしている。人とのかわり合いは大切だということをやっていかないと、自尊感情は育たない。社会から愛されるというのは、人のために何かやるということは、結局自分にとって気持ちのいいことなんだということを体験してもらいたいと思う。市でもボランティア活動の募集をたくさんやってくれる。学校はそれを紹介し、希望に応じて、ボランティア活動に参加して、褒めていただいて、今いったような気持ちいいことなんだという体験を多くするなかで、自分の自信を育てていきたい。体験を通して何かやっていけるとよいと思う。

7. 事務連絡

3回の会議しかないため、こども会議、市民からの意見をみなさんに情報提供させていただき、何回かやりとりをしていきたい。次回は11月の上旬を予定している。こども会議もぜひご覧いただきたい。

8. 閉会